

エネルギー・文化研究所 40周年記念フォーラム

ー現在を読み解き、文化を編み直し、未来を構想するー

- 日時 10月2日(金) 14時30分～(受付開始 14時)
- 会場 OMEビル3階ホール(大阪市中心区道修町3丁目5-11)
- 定員 100名
- 内容 (司会) 前田 章雄 エネルギー・文化研究所 研究員

14:30 オープニング

語りベシアター ～ 語りと音楽、映像をまじえた公演

栗本 智代 エネルギー・文化研究所 研究員

15:00 主催者挨拶

外山 俊明 大阪ガスネットワーク(株) 事業基盤部長

15:05 エネルギー・文化研究所40年の振り返り

小西 久美子 エネルギー・文化研究所 研究員

15:25 特別対談

変化する社会の中で企業内研究所は何を目指し、何を伝えていくのか

佐藤 友美子 学校法人追手門学院理事

植田 信一 大阪ガスネットワーク(株) 代表取締役社長

15:55 休憩

16:15 クロストーク

企業内研究所「エネルギー・文化研究所」による価値創出とは

谷 直樹 大阪市立大学名誉教授、
大阪くらしの今昔館・学術委員

アサダ ワタル アーティスト、文筆家、
近畿大学文芸学部 准教授

弘本 由香里 エネルギー・文化研究所 研究アドバイザー

(進行) 山納 洋 エネルギー・文化研究所 所長代理・研究員

17:15 閉会のご挨拶

富尾 博之 エネルギー・文化研究所 所長

登壇者プロフィール

対談



佐藤 友美子

学校法人追手門学院理事
大阪ガス株式会社取締役（社外）

生活文化の研究者として、多様なテーマ、さまざまなフィールドで調査研究、教育普及活動を実践。

立命館大学を卒業後、サントリー（株）（現・サントリーホールディングス（株））に入社。1989年にサントリー不易流行研究所の設立メンバーとなり、以降約20年間調査研究に関わったあと、サントリー文化財団に移る。退職後は、追手門学院大学地域創造学部教授、同大学成熟社会研究所所長などを歴任。

対談



植田 信一

大阪ガスネットワーク株式会社
代表取締役社長

1990年大阪ガス（株）入社。

本社営業計画部、日本ガス協会への出向、企画部マネジャーなどを歴任。営業・企画・導管など幅広い部門を経験し、導管事業部、リビング事業部、エナジーソリューション事業部の各事業部では計画部長を務める。大阪ガスマーケティング（株）社長、大阪ガス（株）エナジーソリューション事業部長を経て、2026年4月より現職。

クロストーク



谷 直樹

大阪市立大学 名誉教授
大阪くらしの今昔館・学術委員
エネルギー・文化研究所 客員研究員

日本建築史、生活文化史、博物館学を専門とし、近世上方の都市や町家の研究で広く知られる。大阪を中心に都市居住の歴史を明らかにし、学術と社会をつなぐ活動を展開。大阪くらしの今昔館（大阪市立住まいのミュージアム）では、開館から2021年3月までの20年間館長を務め、体験型展示を通じて住文化の普及・啓発に貢献した。今昔館での先駆的な企画・運営で日本建築学会賞、都市住宅学会賞、住総研清水康雄賞などを受賞。

クロストーク



アサダ ワタル

アーティスト、文筆家
近畿大学文芸学部 准教授

専門は、音や声、言葉を手がかりとしたコミュニケーションデザインおよび文化実践研究。主な研究テーマは、表現と社会の関係、音楽による想起とコミュニケーション、ケアの現場における文化実践など。ケア、コミュニティ、教育、アートの現場を横断しながら「住み開き」「コミュニティ難民」「当事場」などの概念を提唱し、実践と理論の往還を通じて研究を行っている。

クロストーク



弘本 由香里

大阪ガスネットワーク株式会社
エネルギー・文化研究所 研究アドバイザー

住宅建築専門誌『新住宅』編集員等を経て、1992年から大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所研究員に。歴史・生活・文化の視点から、都市居住やコミュニティの持続的発展につながる実践研究に携わってきた。

奈良県立大学地域創造学部非常勤講師、大阪府男女共同参画推進財団理事、神戸住環境整備公社理事なども務めている。

特別対談

変化する社会の中で企業内研究所は何を目指し、何を伝えていくのか

大阪ガスネットワーク(株)
代表取締役社長
植田 信一



(学)追手門学院理事
佐藤 友美子

- 成熟社会では「正解のない課題」に向き合うことが重要
多様な価値観を整理し社会に示す役割が求められる。
- 地域の現場に学び、人や知をつなぐ開かれたプラットフォーム
として活動することが企業内研究所の意義である。
- CELには関西各地の実践や新しいコミュニティの動きを
発見し、広く発信する役割を期待する。



- 関西に根ざした研究所として、地域課題や世代間ギャップ
に向き合い、社会への提言を行う存在に
- フィールドワークや地域実践を重視し、人々の暮らしに寄
り添った活動を展開していく。
- 次の10年に向けて、CELの発信力と社会的認知をさら
に高めていく。

クロストーク

企業内研究所「エネルギー・文化研究所」による価値創出とは

大阪市立大学名誉教授、
大阪くらしの今昔館・学術委員
谷 直樹



エネルギー・文化研究所
研究アドバイザー
弘本 由香里



アーティスト、文筆家、
近畿大学文芸学部 准教授
アサダ ワタル



所長代理 山納

- ・ 研究は社会に還元されてこそ意味がある。
- ・ CELの強みは、市民に寄り添い地域の声を丁寧に聞き取り、社会へ編集・発信していくこと。
- ・ 人や社会をつなぎ、新たな価値や出会いを生み出す「座敷・床の間」

- ・ 専門家の知と生活者の知を結ぶ「水平な場づくり」が重要
- ・ 実装とは制度や仕組みだけでなく、暮らしの中に文化として根付くこと
- ・ CELには、公共的利益を生み出すバッファゾーンとして、多様な主体をつなぐ役割

- ・ CELは異なる人やテーマの間に「通路」をつくる編集力を持つ。
- ・ 実践を言語化し共有することで、新たな仲間や活動が生まれ、社会的な価値へと発展する。
- ・ 市民自身が参加し、ともに探究する開かれた知のプラットフォームに。